

## 「四大奉仕の採用について」

2011.11.2 高萩 RC ロータリー情報・研修委員会

1927 年ベルギーのオステンド国際大会において、「目標設定プラン」が採択され、ロータリーの組織管理の合理化が行われました。ロータリーが機構上、四大奉仕を採用したことにより、奉仕活動の実践面と組織管理面が一致しました。

奉仕理念の確立に続いて、奉仕活動の実践面、組織管理面からも四大奉仕が採用されたことにより、今日のロータリーの形が出来上がったと言えるでしょう。

今回はロータリーに四大奉仕を採用した事情等について纏めてみます。

### 1. 「1927 年までのロータリーについての考え方」

1905 年に誰一人信用できる人のいない大都会の中で、心から信頼できる友人を求めて、会員の親睦と事業上の繁栄を目的にスタートしたロータリー活動に、市民への奉仕という発想が加わったのは、1906 年ドナルド・カーターの入会が契機でした。

カーターは職業をもって社会で生活している以上、職業を通じて社会に貢献することが自分が存在する証になるのであって、自分たちだけの利益にこだわって、社会的に何もしない団体に将来性も魅力もないと述べ、一度は入会を断りました。

これを聞いたポール・ハリスは、「物質的互惠」と「親睦」にのみ終始することに限界を感じていたので、この件を好機と捉えて、直ちにロータリーの在り方を転換することにし、市民への奉仕を定款に追加したことから、カーターはシカゴ RC に入会しました。

カーターの入会を機にロータリーの目的に地域社会への奉仕の考え方が加わり、会長のポール・ハリスによって 1907 年公衆便所設置運動となりました。

その後、1908 年に入会してきたアーサー・F・シェルドンによる「ロータリーの奉仕理念の提唱とロータリーの拡大」を巡って、シカゴ RC は大荒れに荒れ、分裂の危機に陥りましたが、シカゴ RC の親睦を守るために考えられたのが、クラブの連合会をつくり、奉仕の理念の提唱と拡大については連合会で行うという方法を取り、ポール・ハリス、チェスリー・ペリー、アーサー・シェルドンらの拡大派は活躍の場を連合会に求め、その結果、世界中にロータリークラブが拡大しました。

職業奉仕は、1916 年の「ロータリー通解——ガイ・ガンデッカー著の A Talking Knowledge of Rotary」の発行によって、シェルドンの唱えた理念がほぼ確定し、それ以降は、道德律をいかに多くの企業に採用させるかという運動に変わっていきました。

身体障害児援助活動に代表される社会奉仕活動は、個人奉仕か団体奉仕か、精神援助か金銭的援助か、RI 主導かクラブ主導かの議論を経て、決議 23 - 34 号によって、その論争に終止符がうたれ、ロータリーの理念・ロータリーの哲学が確立したと言われています。

さらに国際奉仕は、1921 年のアメリカ以外の国での初めての国際大会の開催となった英国エジンバラ大会において、国際理解と親善と平和という究極の目的が確定されました。

この時期の特徴は、ロータリーの一般奉仕概念（勿論、職業奉仕や社会奉仕や国際奉仕も含めて）の理論構築はほぼ完成したものの、奉仕活動の実践についての基準が出来上がって無かったことであります。

ロータリー活動の実態を、「理論と実践」、「親睦と奉仕」、「奉仕の心と奉仕の実践」、「クラブ内の活動とクラブ外の活動」、「**Inside work & Outside work**」に対比させる考え方が主力でありました。

クラブ内における活動とは、一人一業種で選ばれた世に有用な職業人の代表者が、毎週一回開かれる友情あふれる例会に集まって、事業上の発想の交換を通じて自己改善を計り、奉仕の心を学んでいくことを通じて、ロータリーの親睦が生まれると説き、その結果として高められた奉仕の心を持った個々のロータリアンによって、クラブ外で奉仕活動を実践するのが理想的なロータリーライフとされてきました。

従来の方の特徴は、ロータリーの理念を学ぶ場と実践する場が明確に分けられており、更に、「奉仕の実践活動をする以前に、奉仕の心を学ぶ」ことが順序立てられていたことです。

理論と実践は車の両輪に譬えられ、何れを欠くことも許されませんが、理論の裏付けがない行動は単にエネルギーのむだ無駄遣いだけでなく、運動そのものを危険に陥れる恐れすらあります。

ただし、理論の探求が優先される余り、実践がなおざりになり、いわゆる行動を伴わない二重人格者を作る恐れもあり、更に、ロータリークラブを組織体と見るとき、このやり方ではクラブの奉仕活動の実体に沿った管理が困難となる問題点がありました。

## 2. 「四大奉仕の採用」

ロータリー・クラブの発展・拡大につれ、奉仕の実践が強く叫ばれるようになり、ロータリーの奉仕活動が多岐にわたり複雑となってきたことから、今までの二つに対比する考え方を、奉仕プログラムの内容に沿って、ロータリーの奉仕活動に対応する考え方に変え、組織もそれに対応するように変えることが必要になってきました。

そこで、1927年のオステンド大会において、クラブの管理運営を実践に対応させ分類・整理したのが、「目標設定プラン」で提示された「四大奉仕部門」です。実践上または管理上の利便から、ロータリーの機構を抜本的に再編成し、現在の四大奉仕に基づいた委員会構成に変更されました。

理事会の下に、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕委員会を置き、理事をそれぞれの委員長に充てるというもので、現在の委員会構成の原形ともなるものです。

この四分類法を誰が考え付いたかは定かではありませんが、後にRI会長になったシドニー・パスコールとビビアン・カーターがロンドンの公園を散歩中考え付いた発想だという説がありますが、真偽のほどは分かりません。

四大奉仕の採択によって、クラブ外の実践活動の場が、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕に分類され、クラブ内活動はクラブ奉仕ですが、ロータリー解析には親睦という理念の解説だけであり、クラブの管理に関する解説はありません。（これは、現在のRIの資料では、クラブ奉仕はクラブの管理運営の説明に終始し、例会の意義や純粹親睦の説明が全く欠けているのと好対照です。）

なお、この四大奉仕採用に先立って、イギリスとアイルランドのロータリークラブ群が、パイロット・プログラムとして5年間実施し、その結果、非常に大きな成果を得たので、正式採用に踏み切ったと言われています。

これによって、ロータリーの奉仕活動実践と、クラブの組織管理運営とが一致して合理的になりましたが、その一方で、ロータリーの理念を研鑽する場が、四大奉仕のどの部分で行うかが特定されにくいことから、例会が形骸化したり、原理が軽視されたり、奉仕活動の実践のみに走るといった問題点が出てきたと言われています。

今日、奉仕活動の実践だけが重要視され、ロータリーの理念研鑽がおろそかになっているのも、このあたりにその原因があるのかもしれませんが。

### 3. 「1927年前後での Community という言葉の範囲の違い」

1927年までのロータリーの中では、クラブ外の社会すなわち家庭、職場、地域社会、国際社会を総称して Community と表現していましたが、1927年の四大奉仕の採用によって、奉仕活動が職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕、クラブ奉仕にはっきりと分類されることになりました。従って、1923年に決められた決議 23—34号で述べられている Community Service（広義）と、1927年以降の Community Service（狭義）とは、その範囲が大きく異なっていることに留意して、資料を読み解く必要があります。

（決議 23 - 34号は当初「綱領に基づく諸活動に関するロータリーの原則」というサブタイトルがついていましたが、その後いくつかの項目について部分的に改正され、そのタイトルも1926年のデンバー大会で「社会奉仕に関する1923年の声明」と改正されて、四大奉仕の社会奉仕に限定されたように捉えられますが、前文の中で Community Service 社会奉仕は「個人生活、職業生活、社会生活全般にわたって奉仕の理想を適用する」との定義付は改正されていませんので、現在の四大奉仕の中の社会奉仕とは範囲が違います。また、四大奉仕での Vocational Service や Community Service や Club Service は1927年以降の言葉です。）

### 4. 「四大奉仕の導入の解説書である “The meaning of Rotary (ビビアン・カーター著) —— “ロータリー解析” の中で奉仕についての記載内容」

当時のロータリーの綱領は以下の6条からなっており、それをもとに6つの項目に分類して記載。

ロータリーの綱領は次の事項を奨励且つ育成するにある

1. すべての尊ぶべき事業の基礎として奉仕の理想
2. 実業及び専門職業の道徳的基準を高めること
3. ロータリアンすべてがその個人、職業生活及び社会生活に常に奉仕の理想を適用すること
4. 奉仕の機会として知り合いを広めること
5. あらゆる有用な職業は尊重されるべきであるという認識を深めること、そしてロータリアン各自が職業を通じて社会に奉仕するためにその職業を品位あらしめること
6. ロータリーの奉仕の理想に結ばれた実業人と専門職業人の世界的親交によって、理解、親善と国際間の平和を増進すること。

（注：以下の文中の綱領は、上記の1927年当時の綱領でありますから念のため）

## (奉仕理念)

ロータリーの奉仕理念の中核は、職業奉仕であり、万古普遍の哲学であると定義づけています。職業は利益を得るための手段として捉えず、その職業を通じて社会に奉仕するための天職と捉えています。

「ロータリアンの一人一業種制度というのは、常に、自分の職業に関するサービスを確保し、緊急事態が起こった時には、最善を尽くしてそのサービスを提供する義務があることを意味する」と書いてあるが、これはシェルドンが 1921 年のエジンバラ国際大会のスピーチで「靴に関する職業を持った人が一堂に集まった時に、天変地異が生じ集まった人が全部なくなったら、やがて人々は靴を履くことができなくなってしまうというたとえ話から、職業を通じて奉仕するという言葉の真意がわかる」と言った内容の影響を受けているでしょう。

## (職業奉仕)

道徳律とレストラン協会の道徳律を広めたガイ・ガンディガーについて記載しています。

(内容)

1. 雇用者と従業員の関係
2. 購入すべき品物を作っている業者との関係
3. 事業家同士の関係
4. お互いに関連する職業における事業家の関係
5. 一般社会や行政と事業家の関係
6. 消費者や顧客と事業家の関係

これは事業上の様々な関係について定義したものであり、これらの表題のもとにおける道徳的義務を設定したものである。

アメリカから発信された職業奉仕理念について、「無秩序な商売が存在しない古い秩序を持っている国では、革命を起こす必要はない。ロータリーが黄金律を持ち出して説教するずっと以前から、善意は事業を営む上で欠かせないものとして認識されてきた。正直と公平な取引の伝統は、時代を超えて受け継がれ、正直と公平という言葉は、人の心の中に定着している」と批判しています。

He profits most who serves best のモットーについても、イギリス人やヨーロッパ大陸のロータリアンはかなり批判的に受け止めています。職業は神から与えられた天職であるという考え方をシェルドンがとらないことや profits=利益に関することの批判で、RIBI からは、このモットーをロータリーのモットーから外すべきだと提案が国際大会に再三出されています。

## (社会奉仕)

ロータリーの奉仕の理念を社会生活に適用するという、ロータリーの綱領に従って、Service above self の理念によって活動することを説明しています。

活動内容については、決議 23 - 34 号の内容を補足する説明がほとんどであります。

## (知己と親睦) ——クラブ奉仕に関すること

ロータリーの理念を全ての業界の人たちに広めるためには、知り合い（見知らぬ人と友人との間に属する人）の人たちとの付き合いを広める必要があります。

ロータリーライフの中で最も大切にしなければならないことは例会における親睦です。お互いに職業上の発想の交換をしながら、自らの職場や業界にとり入れなければならない、職業奉仕のノウハウを学ぶ場が例会です。職業奉仕とは自らの職業に関連を持つ全ての人々に、profits を share しながら、事業を継続的に発展させていく方法ですから、例会がうまく機能していれば、会員に計り知れないメリットを与えることができるはずです。

どんなことでも相談でき、どんなことを相談しても、わが身の不利にならないことが保証されるような、クラブの会員全てが固い友情で結ばれている状態のことを、ロータリーでは、純粹親睦と呼んでいるのです。

一人一業種制度の職業分類と例会における親睦に関する根拠が記載されています。

### (ロータリーと産業)

従業員との関係について書かれている本項は、特に日本ではあまり語られないでなじみの薄い内容であります。

例会で得られた事業上の発想を自らに職場にとり入れるためには裁量権が必要であるとの理由から、ロータリアンの条件として、経営者であることを前提にしてきましたが、ロータリーの理念を広く伝えるためには、その対象を労働者に広げるべきだという考え方です。また、労働組合はRIにおいて承認された職業分類であり、ロータリー運動が経営者と従業員間でより良い関係を保つべきであるとしています。

産業界に対するロータリー活動の対応は、労働者階級の人々が何不自由なく満足した生活を営む事こそ、実業家の義務であることを認識し、経営者と労働組合の間で、理解と善意というロータリーの精神に基づいた密接な関係を築き、労使間における奉仕の機会として知己を深めるように努力することとしています。

### (国際理解と善意と平和) ——国際奉仕について

綱領第3項の「ロータリアンすべてが、その個人生活、職業生活及び社会生活に、奉仕の理想を適用する」を拡大解釈して、その社会生活の枠を国際生活に拡大しているにすぎないのです。

ロータリーの国際奉仕の本流は、綱領第6項にかかっているように、ロータリアンの世界的友好によって、国際間の理解と善意と平和を増進することにあります。

### (参考)

(I) 1927年のオステンド大会で、四大奉仕に分類されたロータリーの理念と活動を会員に理解してもらうために書かれた最初の啓蒙用として使われた資料が、**The meaning of Rotary** (ロンドンRCの会員 Vivian Carter 著 「ロータリー解析」 田中毅訳——この本の著者は、イギリス人であり、RIBI 管理下における出版物であり、RI に対する批判も各所にみられます) であり、今回はその中から抜粋して纏めたものです。

(II) ここで取り上げた **Community Service** のように、言葉の内容・範囲・意味が変わってきていることがあります。資料を読み解くときには、ロータリーの歴史をもとに何年ごろの資料であるかとか、その当時の背景等を十分に精査する必要があります。